●巻頭言

ハイテクノロジーと人びとの暮らし

Threat of Technology

堀 内 成 子 (Shigeko HORIUCHI) *

日本助産学会副理事長

茨城県東海村の核燃料加工工場における人為的それも初歩的なミスによる事故は、多くの人びとの暮らしを脅かした。この事故が教えてくれた教訓として、私は三つのことを考えた。第一に、伝達されない大切な情報、第二に、慣れという落とし穴、第三に、連鎖的な情報の危うさである。

まず第一に、大切な情報が伝達されないことの及ぼす影響である。危険の存在を知っている者がその存在を公表しないかぎり、危険はそれを知らされていない人びとに被害を及ぼすのである。今回の事故でも、被害者を救助に行った人が、危険の存在を知らされていなかったがゆえに被曝してしまった。知らされていれば、危険を回避する手だては十分にあったし、準備もできていたということを知るたびに、大切な情報が伝達されないことの恐ろしさを痛感させられた。同様なことは、薬害エイズ被害や手抜き工事の建築物の問題についてもいえる。ある分野に通じている専門家が、その状況が危険な事態に至ると予測していたとしても、それを公表しないかぎり、専門家以外は危険な状態を知るすべもなく、その結果として、多くの人びとが多大な被害をこうむることになる。伝達されるべき大切な情報とは何かを、常に考えなければならない。

第二は、慣れという落とし穴である。初めは非常に慎重に導入した技術であっても、慣れのために、その技術のもつマイナス面に対する怖さが薄れてしまい、ある日突然、その怖さが現実のものになる。一時の便法が初めのきちんとした手順に取って代わり、それがあたかも正攻法であるかのように錯覚してしまった結果である。松岡は、産科環境の変遷の中で、麻酔による無痛分娩をする

ための連続的な監視装置の登場によって促進や誘発がしやすい状況が生まれ、次には帝王切開を増やす結果を招いた、と述べ、テクノロジーの連鎖とそれに対する適応の問題について警告を発している。先日、何気ない会話の中で、都市病院の中堅助産婦が、「クリステレル（圧出法）もしないお産なんて見たことありませんねえ」と真顔で話しているのを聞き、驚愕した。産婦にとって非常に受動的でありコントロール権を奪われるような手技が、ルーティンで行われているということである。それに疑問ももたない専門職が、はたして「女性と共にある」存在といえようか。

第三は、連鎖的な情報の危うさである。情報化時代は、情報の伝達の利便性ととも、人びとの暮らしを想像もしなかった方法で脅かすことができる。瞬時に地球の裏側の人びとも通信できるEメールやインターネットの利便性は、一方では、誹謗や中傷の武器ともなる両刃の剣である。限られた地域で起こったことが、非常に広範囲で関係のないものまでをも巻き込んで否定的な意味合いをもって情報伝達されていく。茨城県、あるいは原子力という名前を聞くだけで、それを忌避する感情を人びとに植えつけかねない。O157の渦中にあったときに、堺市の中学生が修学旅行先から拒否されたという出来事と同じで、連鎖的な情報が社会における新たなスティグマを生み出しているように思う。

この時代において、情報のもつプラス・マイナス面やハイテクノロジーの限界を知ることと同時に、人間の持つ可能性をもっと信じることも大切である。助産学研究には、人の血の通った研究を、暮らしを潤す研究を求めている。

* 聖路加看護大学 (St. Luke's College of Nursing)